

## 大切な人から学んだこと

青森県青森市立南中学校

三年 佐々木

萌

私のおじいちゃんは、正直面倒くさい。

いつも大事なことは、ニヤニヤして言うてくれな  
いし、お酒を飲んでは私の部屋に入って来て、「じ  
じは昔すごかったんだぞ。ナンバーワンで、オンリー  
ワンだったんだ。」と訳の分からないことを言うて  
からんでくる。最近では認知症なのではないかと家族  
全員で心配している。

家族の誰がおいしいと言うとそれを何度も買っ  
てきて、冷蔵庫がそれだけで埋まってしまうほどだ。  
いっぱいあるから買わなくていいよと言うと、自分  
は買ってきていないとかたくなに言い張る。買い物  
に行つて財布を忘れてきたり、自分がなくしたのに、  
誰かに盗まれたと騒ぐことも増えた。それでも家族  
全員で、八十四歳にもなればホケるのは当たり前だ  
と、そんなにも気にしていなかった。

そんなおじいちゃんが、突然救急車で運ばれた。  
そんなことになるなんて、誰も予想していなかった  
だろう。夜の九時半頃のことである。部屋にいた私  
は、おじいちゃんがいつものようにトイレに行く音  
に気づいた。おじいちゃんはいつもトイレが長い  
で、最初は気に留めていなかったが、十時頃、気にな  
つて部屋を出ると「萌、ちょっと来てくれ。」と

トイレからおじいちゃんの声が聞こえた。駆けつけ  
ると、おじいちゃんが四つんばいで倒れていた。両親  
親を呼び、おじいちゃんを便座に座らせた。すると  
おじいちゃんが急に震えだした。話しかけても答え  
ることができない。すぐに救急車を呼んだ。意識が  
なくなったおじいちゃんに父が付き添い、救急車で  
病院に向かった。母と姉も後から病院に向かい、私  
はトイレ掃除を任された。急に静かになったトイレ  
は、おじいちゃんの汚物で汚れていた。夜中に姉が  
帰つてきて、おじいちゃんが死ぬかもしれないと言  
われた時は、信じられず、今日の出来事が頭を駆け  
巡るだけで実感がわかなかった。その日はほとんど  
眠れなかった。心配で、次の日の授業も集中できず  
にいた。

学校から家に帰ると、母は自分のせいだと自分を  
責めていた。父は、「萌がもう少し気づくのが遅かつ  
たら死んじゃっていたよ。萌のおかげ……。」と言っ  
ていたけれど、私も自分がもう少し早く気づいてい  
ればと、自分を責めた。

家族で病院に行くと、おじいちゃんは酸素マスク  
をつけて寝ていた。薬で眠くさせるらしい。血液透  
析という方法で血液をきれいにする処置をしている  
らしく、テレビドラマでよく見るような心拍数や血  
圧を測る機械につながれていた。心が重くなった。

おじいちゃんの意識がはっきりしてきた時、よう  
やくおじいちゃんが助かってよかったと喜びを実感  
した。でも容態は樂觀できず、水を飲むことも禁じ  
られていた。それでも水が飲みたいと懇願するおじ  
いちゃん……。せめて水ぐらい飲ませてやりたいの  
にできないもどかしさ。つらかった。

今では、自分で歩く練習をするまで回復した。「奇  
跡」と言ってもいいぐらいまれなことらしい。

今回の一件で、奇跡は自分とはほど遠いところに

あるものだと思っていたが、意外にも身近に起こる  
ものでもあると知った。そして当たり前と思ってい  
たことは、決して当たり前ではないことも知った。  
おじいちゃんは姉が幼かった時から「もう死ぬ。」  
と言い続けながら年を重ねてきた。「死ぬ」が口癖  
のおじいちゃんは、そう言い続けながらもずっと私  
と一緒に年をとっていくものだと思っていた。それ  
は当たり前のことだった。おじいちゃんの死は考え  
たこともなかった。そんな当たり前がくずれてしま  
うかとも思つた瞬間、とてつもない恐怖心が私を  
襲つた。あの時のおじいちゃんの苦しそうな顔。耳  
をつんざき脳天に響いて離れない救急車のサイレン。  
それなのにとても静かなトイレのポツンとした空間。  
そして死の恐怖と直面したときのおびただしい数の  
後悔を私は忘れない。あの時こうしていれば、この  
時こうい言葉をかけていれば、そんな後悔が空か  
ら降ってくるようだった。おじいちゃんが、酸素マ  
スクの中から「死にたい。殺してくれ。」と言つた時、  
私は黙ることしかできなかった。「生きて。死んじゃ  
だめだよ。」と笑顔で励ました母も戸惑っていただ  
ろう。

おじいちゃんは痛みを耐えて、今も生きている。  
私はそんなおじいちゃんを英雄だと思う。最後の一  
秒まで一生懸命生き抜くことは当たり前のことでは  
なく、奇跡だと思う。そして、もしも最後の時がき  
たら、後悔ではなく、いい思い出を胸から溢れるほ  
ど感じたい。だから私は、今日という一日を一生懸  
命自分のために、そして大切な人のために生きてみ  
せる。